#### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

#### [071] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10196

出版情報:語文研究. 71, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

### ≪会員著書紹介≫

#### 中野三敏他編

### 日本書誌学大系50

## 『近世活字版目録』

明らかにしているものといえよう。 るものを網羅したものは本書がはじめてであり、現時点での全貌を 個人蔵のものについては刊行されていたが、現在所在がわかってい 点を網羅したものである。近世活字版に関しては、従来各図書館・ 本目録は所謂古活字版を除く近世の活字による出版物約一四〇〇

とができよう。 することによって、より具体的に近世活字版というものを捉えるこ てはその旨を注記していることがあげられる。それらの写真を参照 めている。更に、本書の特徴として、写真版の存在するものについ 者名・匡郭・界線の有無・行字数・題簽・見返し・版心・序跋者 「近世活字版研究文献目録」・「索引」を付して、利用に便ならし (及び年記)・刊記・刊語・注記事項を記している。また、巻末に 記述の体裁は、一行目に書名・書型・巻冊数、二行目以下に著編

流に過ぎない」ものではあろうが、これだけのまとまった点数があ る出版書に比べればその数は微々たるもので、出版史の上からは傍 た、共編者の多治比郁夫氏の言われるごとく、「近世後期の整版によ るいは幕末以降のものについてはまだ課題も多いようである。 しかし、近世活字版をどの範囲で扱うかということについて、あ ま

> ることが判明した今、近世活字版の包括的な研究がまたれよう。 (平成二年十月 青裳堂書店 A5判 三八六頁 |六000円)

# 瀬良益夫著『古代文学と吉備

伝承をもとに史学・考古学を援用しつつ解明する。 研究と後進の指導にあたってこられた。書名からも窺えるように、 等学校、岡山就実女子短期大学・同女子大学において、古代文学の が集められている。まず第一部は、古代における吉備国の状況を、 本書は、郷土吉備を知悉した著書ならではの、地域に密着した論考 著者は昭和十三年、九州帝国大学法文学部を卒業後、金光学園高

倭建命伝承と吉備氏族

上代の吉備と播磨

南備中の村祭――岡山県浅口郡金光町 上代におけるかしこきもの――感動の根源について―― 和気清麻呂の氏姓と和気氏の祖先伝承

続く第二部は、京都帝国大学大学院在籍中に、 した著者の、『万葉集』に関する論考を収める。 澤瀉久孝博士に師事

美作の二子山と『万葉集』の古歌 『万葉集』における牛窓の潮騒の歌

大伴旅人と吉備の酒 巻十一の能登香山の歌について―

隠りくの泊瀬の国 万葉歌人大伴三中 『万葉集』における有情とその存在の表現 -その人と歌風について---大和の古い国とその文学

# 「ゐる」「をり」を中心として-

あて、政治社会史的視点から当時の文学を考察する。 第三部は、平安時代の文学についての論考の集成。「地方」に焦点を

平安時代文学と受領階層の人々-吉備の国司をめぐって――

民政政治家在原行平とその和歌

平安朝の大嘗会和歌に現れた高梁川流域の地名風物 美作守大江匡房— —吉備国司伝-

平家の武将・歌人 平行盛と備前児島

光源氏と赤鼻の女

からご冥福をお祈り申し上げる。 なお、本書は昭和六十三年に亡くなられた著者の遺稿集である。心

(平成二年十月 瀬良益夫先生論文集刊行会 A 5 判 三一四頁

## 学海日録研究会編纂

『学海日録』

なお無窮会に所蔵されている四四冊の日記は明治文壇史の側面

『日本近代文学大事典』第三巻、「依田学海」の項末尾は次の如く

れた厖大な分量の日記。その存在が知られ、その計り知れない資料 安政三年より明治三四年まで、実に四五年間にわたって書き継が を伝える貴重な資料である。

的価値について度々説かれながら、しかし、衆人の見得る形にはこ

れまでなされることのなかった日記。今回、開始された『学海日録 (全一一巻・別巻一)の刊行は、文字通り、待ちに待たれたもので

日まで、第八巻は、二二年一〇月一五日から二五年四月六日までの ており、第七巻は、明治一九年一○月二五日から二三年一○月一四

一一巻に分冊される『日録』のうち、第七、八巻が既に刊行され

日録をそれぞれ収める。 さて、学海先生の日録を追うて見るに、さすがに、芝居に関する

その他のさま」にまで及ぶ。 記事の多さが目に付く。その感想は細かく、役者の伎芸から「衣服

人と種々のことを語り、様々なことを人より聞く。 そのような中で、先生は詩を賦す。著述を為す。天候に頭を悩ま また、学海先生を訪ねる者は多く、先生も又人を訪ねる。先生は

し、子供の病に胸を痛める。妾宅へ通う。学海先生は多忙である。 『学海日録』は「明治文壇史の側面を伝える貴重な資料である」。

それは間違いない。何しろ「日録」中には錚々たる文人が登場する。

こと。本書の真価はそこから自ずと現れ来るものと思われる。 録』をすなおに読むこと。そうして、学海という人物そのものの魅 力を味わい、また、『日録』の記された時代の空気を胸一杯吸い込む を見せてくれる書物である。まずは、あらゆる先入観を捨てて、『日 ただ、それより以前に『日録』は江戸・明治を生きた一人物の全部

(第七巻・平成二年一一月 四一八頁 四七〇〇円 第八巻・平成三年 四六判 一月 三八九頁 四五〇〇円

#### 瀬里廣明著

# 『幸田露伴―詩と哲学』

れた論考六篇と、書き下ろし「露伴と気の思想」を収める。 本書は、一九六二年から一九七九年にかけて各種の雑誌に発表さ

露伴と杜甫・李白

露伴の『渋沢栄一伝』とその思想

『五重塔』と一無位の真人

露伴文学における華厳思想について

露伴文学と西田哲学

露伴と共産主義

を 著者は、露伴の思想の根幹をなすものは、儒・道・仏が一体化さ を言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴―詩と哲 があったからである。そして露伴の文学にそのようなものを私は見 があったからである。そして露伴の文学に対し、哲学的見地から解明を をある。

うに、孔子、ヘラクレイトス、ニーチェ、ハイデッガー、トルストーの中では、露伴の該博さ、その思想の深遠さを証明するかのよ

ばしいことであり、本書の刊行によって、今後の露伴研究の、ます露伴について、このように多角的視点から考察がなされることは喜何れにしても、近代作家の中でも研究が遅れているとされる幸田わず、自由に往き来する。

(平成二年十二月 創言社 A5判 三七○頁 三五○○円)

ますの発展が期待される。

#### 春秋会著

### 私家集全釈叢書

十七年五月から六十年末にかけて『源兼澄集』を輪読した成果をま典輪読会、春秋会が、『我が身にたどる姫君』の注釈刊行後、昭和五本書は、本学今井源衛名誉教授のかつての受講者を中心とした古本書は、本学今井源衛名誉教授のかつての受講者を中心とした古

作業の最大の得」ともいうべき様々な「異見をなるべく残す」(工藤文の比較検討が十分になされ、加えて和歌の解釈においても、「共同なおすという二段階を経ているため、私家集特有の複雑な諸本の本なおすという二段階を経ているため、私家集特有の複雑な諸本の本なおすという二段階を経ているため、私家集特有の複雑な諸本の本なおすという二段階を経ている。輪読においては、はじ無き歌」、「作者存疑の歌」五十一首を補遺として掲げ、『兼澄集』諸無空の最大の得」ともいうべき様々な「異見をなるべく残す」(工藤書歌」、「京集に松平文庫本一三七首を底本とする一方、「底本に無き歌」、「家集にとめたものである。

重矩氏「あとがき」)方針をとった結果、きわめて詳細な注釈書の観

を呈している。

氏「序」)である。 釈書の解題というよりは、独立した論文と見るべきもの」(今井源衛 澄の伝記と詠歌活動」(福井迪子氏)の二篇が載るが、これらは、「注 また、解説として「源兼澄集の伝本と本文」(田坂憲二氏)「源兼

更に巻末には自立語・歌題・人名・初句索引を付載し、 利用の便

(平成三年一月 風間書房 A5判 三〇四頁 八二四〇円)

板坂耀子校訂

叢書江戸時代文庫17

## 『近世紀行集成』

そのような流れを中心として、本書を構成したかったからである。 半が注目されることなく埋もれてきた。また、橘南溪や菅江真澄等 社会と積極的にかかわり、科学性や合理性に基づいて行動する人々 書は、単なる有名紀行の羅列ではなく、氏の言葉に依れば「政治や 行を丹念に掘り起こしてこられた。その板坂氏によって編まれた本 ろう。本書の校訂者である板坂耀子氏は、膨大な数にのぼる近世紀 体系的に眺め位置づけようという試みはなかったといってよいであ の紀行への関心だけで成り立っていたものであり、近世紀行全体を による一部のものは翻字され、紹介されてはいたが、それは個々 時代の証言としての作品類に、近世紀行文の一つの典型を見、 『国書総目録』だけでも数千を越えるという近世紀行は、その大

> をとって成っている。 (植村政勝)・『未曽有記』『続未曽有記』(遠山景晋)・『筑紫道 採録されているのは、「壬申紀行』(具原益軒)・『本朝奇跡談』

と言われるように、近世紀行に対する一つの視点を提示するかたち

をとることによって、本書に近世紀行文学史としての筋を通そうと ある「さまざまな平凡な小世界の日常への愛着と信頼」という視点 氏はそこに共通する「国家意識」や「合理主義」、更にはその根底に 時に、地域、時代、内容ともにそれぞれ多岐にわたるものであり、 らの紀行文は、ここにはじめて翻字され紹介されるものであると同 草』(林英存)・『花見の日記』(津村正恭)の六作品である。これ れている。しかし、多岐にわたる内容の採録作品ではあるが、板坂 「近世紀行文学史そのものを表現するようになるかたちで配列」さ

軽に近世紀行文を概観できるようになったことは歓迎されよう。 本書の出現により、研究者は勿論のこと、広く一般の読者にも手

(平成三年二月 国書刊行会 B6判 四五九頁 四八〇〇円)